
思う

季樹

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

思う

【Nコード】

N0467B

【作者名】

季樹

【あらすじ】

白岡智史はいつも結城沙耶のことを手伝ったり助けたり。だけど智史は常々思うことがあった……。

曇り空。今にも雨が降ってきそうな空を眺めながら白岡智史は頬杖をついていた。少し離れた場所からは、同じ美化委員の結城沙耶の声が聞こえている。

「結局7時近くまでやってたんだけどさ、終わんなくて。」

二人が任された校内美化ポスターの話である。なんとか意見をまとめたところまではよかったが、完成までとはいかなかったのだ。そんな昨日の話。

「結城。」

眺めていた空を背に智史は沙耶を呼んだ。呼びながら、机の横に掛けてある鞆の中を探る。沙耶が近づいたとき、智史の手には筒状にされた画用紙があった。

「それ、昨日の？」

「そう、できたから。」

手渡されたポスターを広げて、沙耶は感心した。

「すごい……ちゃんとできてる。」

「それでいいなら、後で委員長に渡しておくけど。」

「あ、うん。これでいいよ、じゃあお願い。」

頷いて智史はポスターを鞆の中へとしまった。それを見届けて、沙耶は友達の所へと戻る。そしてまた、智史は空を眺めて、沙耶はおしゃべりに夢中になる。

「何、してんの？」

「白岡のほうこそ何してんの？」

放課後、教室には窓の外を恨めしそうに眺める沙耶がいた。

「例のポスター、委員長に渡そうとしたらなかなか見つからなくて彷徨ってた。」

「で、渡せたの？」

「見ての通りだけど？」

智史は大げさに手を開いて見せた。もちろん、そこには何も持っていない。

「そか、お疲れ様。」

「で？俺の質問の答えは？」

「あー、うん。傘忘れちゃってさ。同じ方向の人いないし、待てば少しは弱くなるかなーって。」

照れくさそうに笑う沙耶。外は昼間の曇りが予兆していたように土砂降りである。

「待っても弱まらないよ、台風近づいてるから。」

「えー！天気予報ちゃんと見てくればよかったー。」

がつくりと項垂れた沙耶をみて、智史は少しだけ口元を緩めた。

「どうすんの？」

「どうするって、なんか笑ってるし。」

「俺、傘2つ持ってるけど。」

「うそ？！」

「嘘。」

「うそなの？！」

「嘘じゃないよ。」

目を輝かせたり落胆したりと大忙しの沙耶は、智史のいい様にからかわれている様だった。少しだけそれを楽しんだ智史は、折りたたみの傘を手に教室を出て行く。

「昇降口に普通の傘置いてあるから、それ貸すよ。」

「え、いいよ、私折りたたみの方で。」

「荷物多いだろ？大きい方がいいだろ。」

改めて自分の荷物の量を見て、沙耶は何も言えなくなった。

「ほら。」

「わーい。困ったときは白岡だねー。」

傘を受け取ろうと手を出した沙耶だったが、智史はなかなかそれを渡そうとしない。

「何？もしかして気が変わった？」

「いや、そうじゃないけど……一回ぐらい”ありがとう”とか言わない？」

「え……？」

突然のことに沙耶の頭は真っ白になった。智史が何を言わんとしているのかさっぱりなのだ。

「ポスター、完成させてきた。英語のとき、修正液貸した。その後問題あてられて解らないって言うから教えてあげた。さっき、ポスター委員長に渡してきた。今、傘貸してあげようと思った。さて、今挙げた中で君は何回俺に”ありがとう”と言ったでしょう？」

「えーと……言ってない、よね？」

「正解。まあ、今日に限らずいつもだけど。」

「うわあ、ごめんなさい。」

ようやく智史の意図を理解した沙耶は、なんだかもの凄く申し訳ない気分になった。改めて考えると、随分とぞんざいな扱いをしてきてしまったのだと。ふと智史を見ると、外の雨を無言のまま眺めていた。沙耶はますます智史を怒らせてしまったのではないかと急に不安になった。

「ホントにごめん！これまでの償いは何でもするから許して。」

「いや、そこまでしてもらおうとは思ってないから。」

「でも……」

「いいって。結城の”大好き”の中に俺が入っていなくても、俺は結城のこと好きだし嫌いじゃない。だから、今回の件にしたって怒ってるわけじゃないから許すも許さないもない。だろ？」

振り返った智史の表情に怒りなどどこにも無く、むしろ笑っている。やはりからかわれているのだろうかと思沙耶は思う。

「えと、よく意味が解らないんだけど。」

「つまり、せめて”ありがとう”ぐらいは言ってくれないと、こっ

ちはなんだか損しているような気分だということ。」

「うん、それは解った。……で、今のは告白？」

「それはない。現状では。」

今度は沙耶の頭の中はフル回転をしていた。智史の言っている意味がやはり解らない。

「えーと、私の”大好き”って何？」

「よく言ってるだろ、”わー！ありがとう！もう○○ちゃん大好き

！！”って。」

「ああ……そう、そのことなんだ。」

(後書き)

さて、この後2人の関係はどう展開するのでしょうか。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0467b/>

思う

2011年1月2日14時02分発行